

学校評価趣意書

令和6年4月1日
尾道市立美木原小学校

1 学校内外の状況

（1）児童について

本校は、平成29年4月に尾道市北部4校が統合し、美木原小学校として開校した。今年度、開校8年目を迎える。児童数121名、学級数10学級（通常学級6、知的障害特別支援学級1、肢体不自由特別支援学級1、自閉症・情緒障害特別支援学級2）、校区は、西は三原市、東は福山市に隣接し、東西に広く、バス通学者が約5割いる。

開校8年目を迎えた現在は、児童の友達関係も深まり、落ち着いた学校風土をつくることができている。統合当初4地域のつながりを深めることを念頭に組織されていた育友会も、地域の枠組みを解体し、学年の輪を構築するよう組織を編成し、美木原小学校区としての団結が高まっている。

「自分たちで創る」をテーマに、児童自らが学校生活を楽しくよりよくするための取組を企画・運営すること、児童会と委員会が協働した生活指導や集会等を実施することが美木原小学校の伝統となっている。令和3年度には、この取組により「尾道きらり賞」を受賞した。児童アンケートでは、主体性に関する項目で肯定的評価をした児童が昨年度末には87.7%であった。感染症対策は5類移行後に一定の落ち着きがあり、児童が関わり合いの中で協働的に活動できる場を設定できるようになった。

学力については、「考える 伝え合う力」をキーワードに授業改善に取り組んでいる。また、学校図書館を活用し、図書資料や新聞を情報源や発信方法として活用することにも継続して取り組んでいる。国語科においては、令和3年度から、フレームリーディングの手法を取り入れた指導を実践してきた。文章全体をフレームとして捉え、俯瞰→焦点化→統合の三つのステップで全体を読み解くことで、物語文や説明文の型を理解し、初見の文章の読み取りでもフレームを活用することができる力の育成に取り組んできた。昨年度は単元末テスト・活用テストの校内平均はほぼ全国平均であった。12月に実施した標準学力調査の結果は以下の通りであり、中学年で全国平均を大きく下回る結果となった。（1・6年生は学校独自の取組のため、尾道市の平均は公開されていない）

〈国語科〉

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
美木原小	66.1	81.7	72.0	62.8	68.9	74.6
尾道市	-	79.9	66.9	65.0	72.6	-
全国	74.8	79.3	68.4	64.2	69.9	66.6

〈算数科〉

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
美木原小	74.3	73.5	83.2	63.0	60.8	82.3
尾道市	-	75.4	75.8	68.9	62.9	-
全国	78.2	73.1	69.9	64.8	58.3	73.8

国語科・算数科の両教科において、例えば2年生では「倍の意味理解」、4年生では「段落の意味理解」が不十分等、各学年で定着させるべき内容の弱さが課題とみられた。算数科では高学年でも、九九や割り算のつまづきが課題であり、個への支援の充実が課題であった。

本校では、週に一度「NIEタイム」を設定し、指導の充実に取り組んでいる。児童のワークシートや指導について等を交流する中で、「NIEタイム」は、職員にとって一定の効果を感じられるもので、児童にとっても自分の考えを書くことの抵抗感が下がってきた様子が見られ、その成果を感じている。また、朝の会やドリルタイムで音読に取り組み、文章を読むことに慣れ親しませている。毎日のドリルタイムでは、当該学年の学習の反復練習や所見の文章の読み取りに集中して取り組ませ、基礎基本の学力定着を目指している。授業時間以外の時間設定の中でも、教科で学習した内容が活用できるよう、意図的な指導を工夫している。

今年度も継続して、児童の確かな学力定着の取組の充実に取り組む。

(2) 教育活動

本校では、これまで、児童につけたい資質・能力を「コミュニケーション力」「情報活用力」「表現力」とし、学校図書館教育やNIEを進め、フレームリーディングを活用した国語科の授業づくりを通して、「考える、伝え合う力」の育成を図ることに取り組んできた。思考ツールを活用し、情報を取り出し思考を整理する手段を身につけさせたり、フレーム（目のつけどころ）をもたせて読むことの面白さを体感させたりする指導の工夫について研修を重ねてきた。

今年度の研究主題は「考える、伝え合う力の育成」、副題は「フレームリーディングを活用した国語科の授業づくり」である。今年度の教職員で昨年度までの実践を共有し、これまでの取組を継続して深めていくとともに、国語科ではフレームリーディングの指導法をさらに練磨し、学年に応じてフレームを積み重ね、文章構成や内容を捉える力を育成していきたい。その上で、自分の考えを持ち、人との関わりの中で伝え合う力を高め、広げることができる児童を育成していきたい。

生活面では、今年度も、学習を支える学校生活を自分たちで創ることを大切に、「生活を創る」取組を継続し、児童の主体的な学びを育てていく。

また、小中連携について、美木中校区（美木中学校、三成小学校、美木原小学校）のスクールミッションは、「小中連携教育を核とした確かな学力定着の取組の充実」である。今年度も、美木中学校区の3校でこれまで以上に連携をとりながら教育活動を進めていく。15歳の生徒の具体的な姿を共有し、小中9年間を見通した児童生徒の育成に取り組む。

(3) 教員集団

本校は教職員集団の年齢構成や経験のバランスに偏りがある。今年度も、異動による教職員の入れ替えが多く、昨年度までの取組を共有することや、児童実態・保護者・地域について、全教職員で共通理解をもつことが大切になっている。また、運動会や地域行事、育友会活動等、コロナ禍で実施できなかった様々な取組について、十分に経験していない教職員が全体の3割程度を占めており、学校教育活動を伝承することにも課題がある。

今年度も学校評価と業績評価をリンクさせ、教職員一人一人が学校教育目標達成へ向けた具体的な実践が行えるよう、年度初めに教科指導内容と具体的指導方法を共有化し、指導の学年差が生じないように留意する。また、研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励を始め、それぞれの教職員が個性や良さを発揮し、協働的に仕事に取り組むことができる職場づくりを目指している。

(4) 教育環境

学校図書館環境の整備や新聞購読を継続しており、読書活動やNIEの取組を土台として、学力向上の取組を進めることができる環境の構築に努めていく。また、今年度も中学校区の連携教育を継続し、美木中・三成小と学習指導や生徒指導の教育方針を揃えることで、義務教育9年間の指導の連続性を図っていく。今年度も、小中連携加配が措置され、美木中学校の外国語教師が、6年生に週2時間の外国語科の指導を行うこととなった。このことは、児童の外国語の理解が進むだけでなく、中学校との連携の強化や中1ギャップの解消にもつながると考える。

2 スクールミッション

小中連携教育を基盤とした確かな学力定着の取組の充実

3 スクールビジョン

- 児童の主体性を育み、未来につながる学力をつける学校
- 幼・小・中の連携による学びの連続性を大切にする学校
- 家庭・地域とともに、子供の育ちを考える学校

4 重点課題

つけたい資質・能力を学習・生活の基盤となる「コミュニケーション力」「情報活用力」「表現力」とし、次の2点の姿を目指して、教育活動を推進する。

◆自ら課題を発見し、探究的に学ぶ子供 ◆自分の考えを自分の言葉で発信する子供

課題の取組として、生きる力の基盤となる「豊かな言葉と心を育む」読書活動を教育活動の土台として、学習と生活の両面から児童の主体性を育てる。

「学びを創る」・・・「考える、伝え合う」力を育成する授業改善

「生活を創る」・・・児童自らが学校生活を創る特別活動の充実－児童会活動・学級活動－